慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	習慣的行為の動的再構成
Sub Title	
Author	村井, 重樹(Murai, Shigeki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007.) ,p.185- 188
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成18年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000064-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

乙竹岩造は，優秀児教育を論じることは，教育そのものを論じることなのであって，優秀児教育はそれ単体で論じるべき性質のものではない，即ち優秀児教育問題の本質は「教育上に個性の長所を十分に発揮せしむるにはどう工合をしなければならぬかというやうな，一般教育上の大事な問題[ix]」とする。そうであるならば，「当時このような問題にはどのような結論が出されたのか」や「優秀児教育は，いかにして時代に呑み込まれていったのか」という問題には，同時代における才能や教育の捉えられ方が端的に表れていると考えられる。今後は収集した他の雑誌記事内容を加えてより詳細に検討するとともに冒頭で触れた「周囲の状況」に関する先行研究を参考に，優秀児や優秀児教育がいかなる理論で社会に迎えられ，消えていったのかを検討し，当時の人々，ひいては日本人が根底に抱いている「優秀児観」，ひいては「才能観」，「教育観」を明らかにしていきたい。

注

i　英語でいう "gifted"。"gifted" とは「以下の領域において，高度なパフォーマンスを示す潜在能力を有していることが明らかであり，その潜在能力を最大限に発達させるには，学校で通常提供されないサービスやアクティビティを必要とする若者」(P. L. 100-297 2004) であり，日本では「優秀児」の他「穎（英）才児」，「才能児」などの語で表されている。

ii　『上野教育』第 278 号　明治 43 年 pp. 5-79。

iii　主筆である曽根松太郎と推測される。

iv　社説「関東東北連合教育会の決議を評す」（『教育界』第 10 巻第 1 号）p. 4。[v] 同上。

vi　同上。

vii　南真紀子「榊保三郎と優秀児研究」（未発表）参照。

viii　本文ママ。

ix　『教育界』第 10 巻第 3 号 p. 15。

習慣的行為の動的再構成

村　井　重　樹

1. 本研究の目的

本研究は，目的-手段が明確でないがゆえに，あるいは心理学的な刺激-反応と理解されてきたがゆえに，社会学的行為論の重要な対象としての位置を十分に与えられることがなかった習慣的行為の理論的考察を目的とした。そして，ここでは，ブルデューの「ハビトゥス」概念を立脚点とする一方で，その問題点を指摘し，デューイやメルロ＝ポンティの「習慣」に関する議論を援用することで，「習慣的行為の動的再構成」へと向かう方途を模索した。以下，その概要を説明する。

2. 「ハビトゥス」概念とその問題点

2-1. 「ハビトゥス」概念が提起したもの

ブルデューの「ハビトゥス」概念は，主観主義と客観主義の対立，つまり二元論的思考を乗り越えようと企図されたものである。そこで，ブルデューはその隘路を切り抜けるために，「ハビトゥス」概念によって行為の「習慣」という次元に着目すると同時に，それが単なる機械的反復に陥らない「習慣の動

態性」という着眼点を提起しているように見える。

ブルデューのいう「ハビトゥス」は，歴史的・社会的条件の制約にとらわれながらも，そうした条件による一方的な決定にとどまることなく，自由に行為を産出する能力である。そこでは，社会的条件という制約をまったく排した自由を認めない一方で，機械的な再生産とも異なる実践が産出されるという側面が強調されているのである。ここに「習慣の動態性」への視点を嗅ぎ取ることができる。

2-2. 「ハビトゥス」概念への批判

しかし，ブルデューの「ハビトゥス」概念に対しては，様々な批判がなされてもいる。現在の議論，すなわち「習慣の動態性」に限定してそれらのうちから必要なものをとりだせば，二点にまとめることができると思われる。まず，ひとつは，「ハビトゥス」概念が，決定論に陥っているという指摘である。この点についてR・ジェンキンスは，次のように述べている。

> ハビトゥスは，『客観的な』実践の源泉であるが，それ自体社会生活の『客観的な』パターンによって産出された一連の『主観的な』発生原理である。そのようなモデルは，最終的に別の型の決定になるか，洗練された形態の機能主義になるかである」(Jenkins [1992] 2002: 82)。

ここでジェンキンスが指摘しているのは，社会的条件によって産出された「ハビトゥス」が実践を産出するというのは，結局同じ社会的条件を繰り返しただけではないのか，ということである。つまり，「構造化された構造」である「ハビトゥス」が，「構造化する構造」となったところで，もとの構造の反復ではないか，ということだ。

さらに，もうひとつは，そもそも行為の二元論的把握を拒否するために導入され，そのどちらの側からの説明を避けるように，変幻自在な形で，ブルデュー社会学のいたるところで登場する「ハビトゥス」による実践の産出が，いかなる形でなされるかについての理論的な説明がなされていないということである。ジェンキンスは，二元論を免れようとする「ハビトゥス」概念の不明瞭さについて以下のように述べている。

> 「このジレンマから抜け出す彼の方法であるハビトゥスは，容易にその理論的起源を行動主義心理学に持ちうるような，無意識の身体化された習慣と思考のない実践という，二つの状態の間のどこかに存在する。我々は，依然として，ハビトゥスが何であり，それがいかにして実践を産出するよう働くのかを知らないのである」(Jenkins [1992] 2002: 93)。

ブルデューは，「ハビトゥス」から産み出される実践が決定論に陥らないというものの，その論理的機制については明瞭に述べていない，そうした点が指摘されているのである。そのことは，「ハビトゥス」によって決定論を免れるような実践が産み出されるというブルデューの主張自体が，十分に根拠づけられていないということを示しているのである。

しかし，「習慣」理解を刷新しようとブルデューが提起した「ハビトゥス」という視点は，たとえ彼の理論化に問題を含んでいようとも，重要である。この含意自体を放棄してしまってはならないのであって，そのことは「習慣」という視点からさらなる検討を必要とするものだと考える。では，その論点を

敷衍するためにはどうすればよいか。それは,「習慣」と行為の関係,詳述すれば,行為者が身体化した「習慣」と行為によって現れる新奇性や創造性との関係を,理論的に探求し,その論理的機制を明らかにしていくことであろう。

3. 過程としての「習慣」

以上で述べた論点を深めるために,ブルデューと同じ視点,つまり「習慣」という視点を共有する論者の議論を援用するのが近道となる。ここでは,ブルデューの「ハビトゥス」概念を立脚点としながら,M・メルロ=ポンティ,J・デューイらの議論を借りて,「習慣の動態性」という論点について検討を行いたい。

ブルデューやメルロ=ポンティ,デューイが示すように,身体化された「習慣」は前客観的に作用する意味の基盤であるが,こうした「習慣」は行為の産出においていかに作動するのか。その立脚点として,やはりブルデューの言明をまずもって確認しておきたい。

> 「未来の意味方向に変形を加えるよりは,それを堅固にし強化するのに適した指標の選択的知覚の原理であるハビトゥス,これを生産した(過去の)諸条件に同一ないし相似の客観的諸条件のすべてに予め適応した反応の産出マトリクスたるハビトゥスは,自らが見越し,かつその到来に寄与する高確率の未来—それはハビトゥスがついに知りうる唯一のもの,つまり推測された世界の現在の中に直接読み取るのだからだ—との相関において定まる」(Bourdieu 1980=1988: 104)。

この箇所から読み取れることは二つある。まず,「ハビトゥス」は,現在のなかで未来を予見するということである。もちろん,これは「ハビトゥス」によってなされるがゆえに,過去の経験を基礎とした予期であって,現在のなかに過去と未来が含まれるということだ。次に,この予期によってなされる行為が,「ハビトゥス」を生産した社会的条件と調和した反応を産み出すことが示されている。

こうしたブルデューの議論を見ると,ジェンキンスのいう決定論という指摘がすぐに思い浮かぶだろう。問題なのは,「ハビトゥス」がそれを産出した社会的条件と予め調和する行為を産出するという仕方で論じられていることなのだ。つまり,ここには,「ハビトゥス」が産出した行為と「ハビトゥス」の関係が不在なのである。それゆえ,N・クロスリーがいうように,「行為が習慣を産出する行為者のより精緻な概念無しに,ブルデューは,いかに習慣が産み出され,修正され,物質的な生活状況の要求に適合するかを説明することができない」(Crossley 2001: 96)のである。

ここで必要となるのが「習慣の獲得」に関する議論であろう。その「習慣の獲得」に関して,メルロ=ポンティは,「身体が一つの新しい意味づけによって滲透されたとき,身体が一つの新しい意味の核を同化したとき,身体が了解した,習慣が獲得された,と言われるのである」(Merleau-Ponty 1945=1967: 246)と述べている。ここでメルロ=ポンティは,タイピストやオルガン奏者が,身体と世界の相互作用のなかで,実践的に意味を把握するという事態を示しているのであるが,これは行為を契機として,「習慣」が動態的に獲得されるという視点を含意していると考えることができる。「習慣の獲得とは身体図式の組み替えであり更新」(Merleau-Ponty 1945=1967: 239)なのである。

さらに,こうした問題をより明確にする場合,プラグマティズムの視点が有効である。H・ヨアスにし

たがえば,「プラグマティストは，あらゆる人間行為が，非反省的な習慣的行為 (action) と創造性の行為 (acts) の緊張状態にある，ということを主張している」(Joas 1992＝1996: 129) のであるが，そこでは，行為において現れる，新しい，未知の状況がいかに「習慣」の再構築を迫るものであるかが示されている。ブルデューは,「ハビトゥス」による「実践仮説」を伴って行為が産出されると考えたのだが，こうした視点を考慮すると，必ずしも持続のみを語ることが,「習慣」という論点にとって満足のいくものではないということが明らかになる。なぜなら，行為者は，日常生活のなかで，不確定な状況にさらされながら，行為によって環境と相互作用し,「習慣」を動態的に獲得しているからである。ブルデューは，こうした「ハビトゥス」と行為の関係を見逃しているのであり，それゆえ「習慣」が絶えず新奇性を伴いつつ生成される「過程」としての側面を考慮していないのである。デューイがいうように,「新しいものと古いものとの結合は，単なる諸力の合成ではなく，再創造であり，そのなかで，現在の衝動性は形態と実質を獲得する一方，古い『貯えられた』素材は，新しい状況に遭遇することを通じて，新しい生命と魂を与えられ，文字通り蘇生するのである」(Dewey 1934＝2003: 84)。

4. おわりに

ここまで，ブルデューの「ハビトゥス」概念をめぐる議論を立脚点として,「習慣的行為の動的再構成」に関する一つの可能性を素描した。ここで示そうとしたのは，ブルデューの「ハビトゥス」概念に対する批判を通して提出された「習慣」という視点の抱える問題が，その生成の次元とそれに伴う行為との関係を含めて論じられる必要があるということである。ブルデューが十分に論じきれていない「習慣の動態性」という視点を満足のいく形で展開しようとすれば，こうした側面を見逃してはならないのではないか。また，このことは,「習慣」を論じることが，新奇なものを論じることと一対となっているということを示すことでもある。行為におけるこの二側面は分離不可能なものなのであり，動態的な現実を生きる行為者は，こうした緊張関係の中で生きている。それゆえ，ブルデューのいう「論理の論理」ではない,「実践の論理」の把握のためにも,「習慣的行為の動的再構成」が重要となるであろう。

引用文献

Bourdieu, P., 1980, *Le Sens pratique*. Les Editions de Minuit. 今村仁司ほか訳『実践感覚 1・2』みすず書房，1988-1990.

Crossley, N., 2001, "The Phenomenological Habitus and Its Construction." *Theory and Society*, **30**: 81-120.

Dewey, J., 1934, *Art as Experience*. 河村望訳『経験としての芸術』人間の科学社，2003.

Jenkins, R., [1992] 2002, *Pierre Bourdieu revised edition*. Routledge.

Joas, H., 1992, *Die Kreativitat des Handelns,* Suhrkamp. J. Gaines and P. Keast (trans.) *The Creativity of Action*. Polity Press 1996.

Merleau-Ponty, M. 1945, *La Phénoménologie de la Perception*. Gallimard. 竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学 1』みすず書房，1967.

地域通貨を契機としたまちづくりの可能性と限界についての調査研究

山　田　賢　司

はじめに

本研究の目的は，地域通貨とそれを取り巻く地域社会を対象に，地域内のさまざまな行為者の，地域通貨ならびにこれに関連する諸活動に対する意識や行為を調査することを通して，地域通貨を契機としたまちづくりの可能性と限界を明らかにすることである。

上記の目的を踏まえたうえで，本報告では次の三つを課題とする。第一に，まちづくりの手段として地域通貨を位置づけることにする。第二に，筆者が2003年4月から2005年11月にかけて調査を行った，千葉の地域通貨「ピーナッツ」とそれを取り巻く地域社会（西千葉地区＝千葉市中央区松波＋稲毛区弥生町）の事例を元に，地域通貨を契機としたまちづくりの困難性ないしは限界について触れることにする。そして第三に，同じ事例を別の視点からみることで，地域通貨を契機にしたまちづくりの可能性について検討する。

まちづくりの手段としての地域通貨

地域通貨の特質や意義については，すでにさまざまな経済学者・経済人類学者によって考察がなされているが，その代表的な論者の論考（西部，2002；丸山，2004；森野，2004）を整理すると，地域通貨は，地域の中に「互恵的交換のネットワーク」を形成する媒体だということになる（山田，2006）。なお「互恵的交換のネットワーク」とは，①一般的な貨幣を媒介にした交換のような，売り手と買い手の間の人格を伴わない（第一次接触のない）交換ではなく，他者に対して何らかの貢献をしようとする「売り手（提供者）」と，そうした提供者を信頼する「買い手（受益者）」との間で行われる人格を伴った相互扶助的な交換としての「互恵的交換」，②地域通貨によって，「互恵的交換」が特定の二者間だけでなく，より大勢の人たちのネットワークの中で行われる「交換のネットワーク」，そして③「互恵的交換」と「交換のネットワーク」が形成されることにより，ヒト，モノ，カネ，情報などの資源がこの中を循環するという「資源の循環」の三つの要素を含む概念のことである。地域通貨の代表的な論者は，地域通貨を導入しさえすれば，「互恵的交換のネットワーク」が形成されると受け取ることのできる考察を展開しているのである。

しかし現実の地域通貨は，参加者が集まらずに活動休止や廃止に追い込まれている例も少なくない。また，現在稼働中の地域通貨においても，参加者が一定以上は集まらずに苦戦している例も多く，「ピーナッツ」もその例外ではない。こうした点を踏まえると，地域通貨は，あくまでも「まちづくりのための一つの手段」と捉えたほうがよいように思われる。なお，ここで言うところの「まちづくり」とは，地域の行為者（個々人および組織）間の第一次接触を促し，それを基盤に，必要なときに互いに協力し合うことのできる関係性を構築することである。そして地域通貨は，こうした意味での「まちづくり」を行うにあたって，普段は接することのない地域の人たちを一堂に会することができるようにするための「話題づくり・きっかけづくり」として作用するのである。つまり地域通貨は，「話題づくり・きっかけづくり」という点で，あくまでも「手段」なのであり，地域通貨そのものが「まちづくり」を促すとい

うわけではないのである。

では次に，地域通貨「ピーナッツ」の事例から，地域通貨を契機としたまちづくりの困難性（限界）および可能性について解明および検討していくことにする。

地域通貨「ピーナッツ」の概要

地域通貨「ピーナッツ」は，2000 年 4 月より，千葉市中央区松波にある「ゆりの木商店会」の店舗にて導入が始められた地域通貨である。この商店会は，1998 年にできたテナント店舗中心の新興の商店会である。現在，「ゆりの木商店会」でこの地域通貨のメンバーになっている店舗は，35 軒中 25 軒ほどである。地域通貨「ピーナッツ」の全メンバー数は，2005 年末の時点で約 1100 人であり，数字の上では日本でもっとも規模の大きい地域通貨の集まりの一つであることが言える。地域通貨「ピーナッツ」は基本的に，「通帳方式」と呼ばれる地域通貨であり，この地域通貨を使って取引を行う際には，「大福帳」と呼ばれる通帳に，取引の日にち，取引の相手，取引された「ピーナッツ（ピー）」の額を記入することになっている。「ピー」とは，貨幣でいうところの円，ドル，ユーロなどに当たる，地域通貨「ピーナッツ」の単位であり，1 ピー＝1 円，1 時間の手伝い＝1000 ピーが，おおよその価値付けの基準になっている。つまり，「ピーナッツ」のメンバーが 1 時間，他のメンバーの手伝いをした際には，相手から 1000 ピーをもらうことができるということである。また，お店で地域通貨を使用する場合には，その店の商品の定価（円）のうち，5% から 10% の額を，ピーで支払うことができるようにしている店舗が多い。なお，地域通貨「ピーナッツ」に関連する実践的な活動は事実上，西千葉地区の商店主が中心になって開設したアソシエーション「ピーナッツクラブ西千葉」が担っており，実質的なリーダーは，「ゆりの木商店会」の初代会長で美容師の，K. M. 氏である。

地域通貨を契機としたまちづくりの困難性（限界）

地域通貨「ピーナッツ」が西千葉地区において置かれている状況として，まず，部分的ではあるものの，「互恵的交換のネットワーク」が成立しているということがあげられる。このネットワークには，「ピーナッツクラブ西千葉」に属する一部商店主と，「ピーナッツ」のシステム管理を行っている「ピーナッツクラブ事務局」の成員（2 人），そして，稲毛区弥生町にある千葉大学の一部関係者（学生，教職員，卒業生）が参加しており，活発な相互行為が繰り広げられている。

しかし一方で，「ピーナッツ」を媒介に形成された「互恵的交換のネットワーク」は規模が小さく，参加者の属性に著しい偏りがある（つまり，前述の人たち以外の参加が活発でない）ことも明らかになった。例えば，地元の地域住民組織（町内会および古くからある商店連合会）とは疎遠ないしは対立的な関係にあり，また，「ゆりの木商店会」でも「ピーナッツ」の活動に積極的にかかわっている店主は僅かであることがあげられる。加えて，西千葉地区の（大学関係者を除く）一般住民の「ピーナッツ」絡みの活動への参加もほとんど見られなかった。

以上のことを踏まえるならば，地域通貨は，参加者の数を増やし，地域内のさまざまな立場の行為者をその活動に参加するよう促すことで「まちづくり」に繋げていくという点においては，困難性ないしは限界があるといわざるを得ない。

地域通貨を契機としたまちづくりの可能性

前述のとおり，「ピーナッツクラブ西千葉」の商店主と，「ピーナッツクラブ事務局」の成員，そして千葉大学関係者との間で活発な相互行為が繰り広げられている。例えば前出のK. M. 氏が，自身で始めた通所介護施設の2階スペースを，千葉大学の大学院生（設立当時）が設立したNPO「T」の事務所として月5万ピーで貸し出す代わりに，「T」のメンバーが，「ピーナッツクラブ西千葉」主催でほぼ月1回行っているフリーマーケット「第三土曜市」に模擬店を出店して場の盛り上げに一役買っていることがあげられる。また，学生サークルの美術系同好会（仮称）は，「第三土曜市」の際に似顔絵のブースを出店したり，2005年に「ピーナッツクラブ」のマークを製作したりしている。そして，「リ・サイクル」という任意の学生団体は，千葉大学構内などに放置されている自転車を再利用できるようにする活動を「ピーナッツ」を活用して行っており，また2005年秋には，「ピーナッツクラブ西千葉」と協同で「西千葉まちづくり協議会」を開催したりしている。

こうした「ピーナッツクラブ～」と大学関係者の関係からは，前者の活動に後者が参加し，その活動に後者が何らかの「楽しさ」を見いだすことによって継続的な相互行為が促されていることがいえる。そしておそらくは，こうした継続的な相互行為によって，当事者のあいだでは，一種の「われわれ意識」が生じていることが考えられる。確かに地域通貨「ピーナッツ」の活動は，地域内の広い範囲でのまちづくりを促すという点では限界があるのかも知れない。しかし，地域通貨を媒介にしたまちづくりを目指す活動が，それまで互いに接点のなかった行為者同士の継続的な相互行為を促し，われわれ意識の醸成にもつながる「出会い」の場として機能するという点では，（たとえ参加者が限られていたとしても）可能性をもった活動であることがいえる。したがってこうした活動は，居住者同士の第一次接触を多少なりとも衰退させ，彼らを機能集団における機械的な役割に埋没させるといわれる都市社会において，そのような負の影響を緩和させる機能を発揮する可能性が十分にあるのではないかと思われる。

主要参考文献

丸山真人，2004，「資本に転化しない『貨幣』：地域通貨」丸山真人・内田隆三編『〈資本〉から人間の経済へ』新世社：166-184.

森野栄一，2004，「自立経済と甦る貨幣改革論の視点」丸山真人・内田隆三編『〈資本〉から人間の経済へ』新世社：145-165.

村山和彦・塚田幸三，2001，『地域通貨の可能性―ピーナッツ実践報告―』千葉まちづくりサポートセンター.

西部忠，2002，『地域通貨を知ろう』岩波書店（岩波ブックレット No. 576）.

山田賢司，2006，まちづくりの手段としての地域通貨―千葉の地域通貨『ピーナッツ』の事例をもとに―」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第62号.